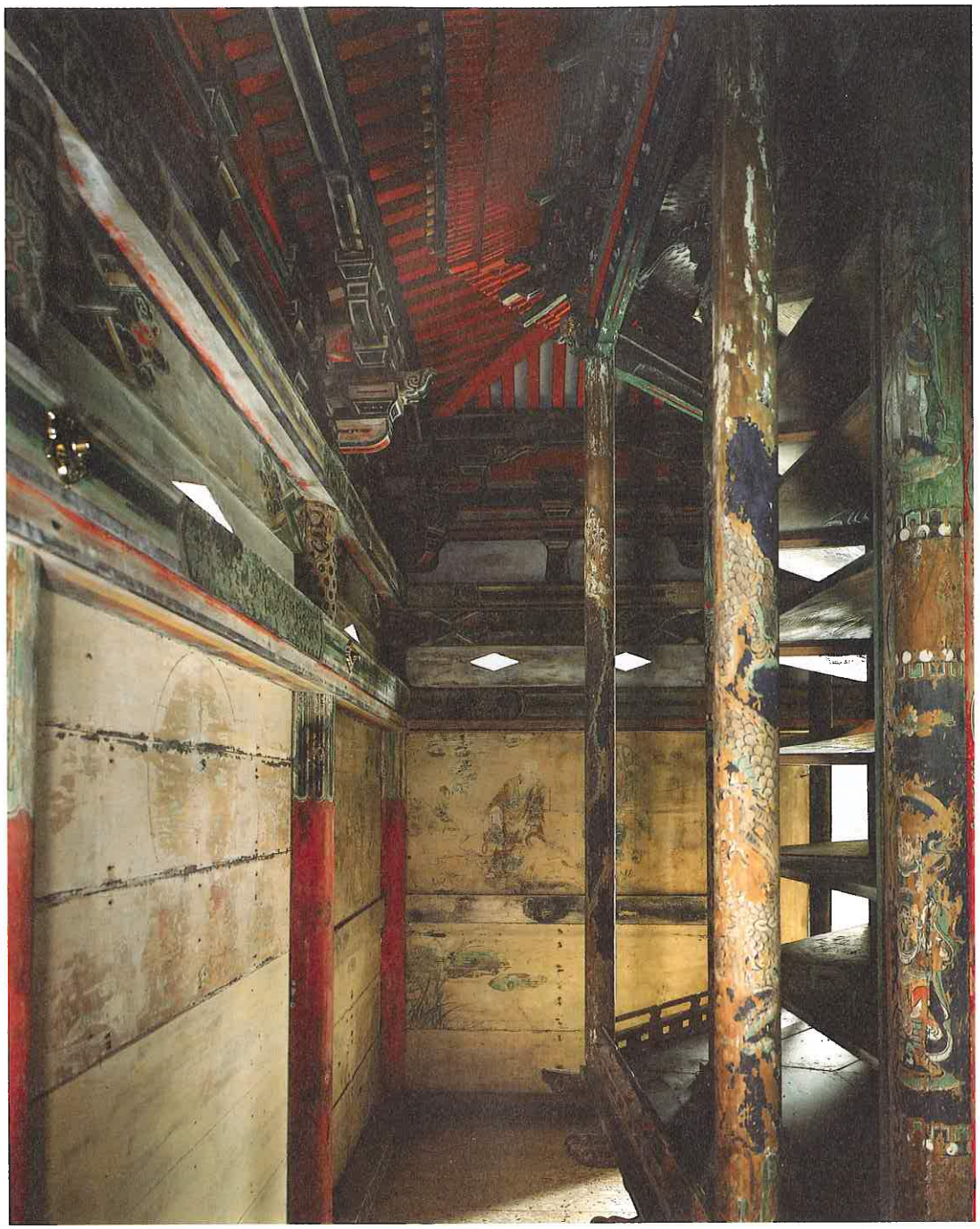


奥之院経蔵内部　関連記事は５頁

霊宝館だより

題字・畠野光義師

霊宝館だより　第105号
平成25年2月26日発行
和歌山県伊都郡高野町高野山306
(財)高野山文化財保存会
高野山霊宝館
電話0736－56－2029
URL http://www.reihokan.or.jp

利用案内

開館時間
■11月1日～4月30日　8時30分～17時00分
■5月1日～10月31日　8時30分～17時30分
■休館日　年末年始のみ
■拝観料　大人　600円　高・大学生　350円　小・中学生　250円
高野町に住民票がある方、高野町内の学校に在籍する学生の方は入館無料です。
■専用駐車場あり

第105号　目次

冬期平常展のご案内……2～3
収蔵品の紹介79……4
高野山の古建築 第九回……5
第七回もみじ祭フォトコンテスト
入選作品発表……6～9
文化財特別公開、もみじ祭開催報告ほか
……10～11
よもやま話 vol.26……12～15
霊宝館の庭園……16

冬期平常展「密教の美術」開催中

第７回もみじ祭フォトコンテスト

全応募作品展示中

いずれも４月21日(日)まで

毎月21日（弘法大師の日）ご来館の方にプレゼントあり！　ホームページ割引券もご利用ください

冬期平常展

「密教の美術」小特集「仏画にみるヘビ」開催中

4月21日（日）まで

十二天曼荼羅図

重要文化財　深沙大将立像（快慶作）

弘法大師空海は古来より能書家として知られ、平安時代の書の名人「三筆」の一人に挙げられています。冬の展示では、高野山に伝わる弘法大師の書を、複製や後世の写しを中心としてご紹介します。弘法大師が影響を受けた中国の書や、弘法大師の書から派生した、独特の書体の「大師流」文字などもあわせて展示しています。さまざまな視点から大師の書の世界を感じてみてください。

また、平成二十五年の干支・巳にちなみ、「仏画にみられるヘビ」の小特集を本館紫雲殿にて開催しています。

主な出陳品

前期：平成24年12月22日（土）～平成25年2月24日（日）

後期：平成25年2月26日（火）～4月21日（日）

絵画

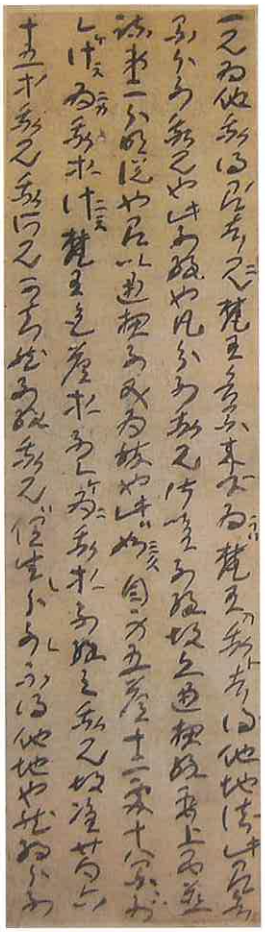
県指定	騎獅文殊菩薩像	桜池院（前期）
	綱引五髻文殊菩薩像	親王院（後期）
	真言八祖像のうち龍猛像・一行像	金剛峯寺
	大元帥明王像	金剛峯寺
	軍荼利明王像	光明院
	不動明王三童子像	金剛峯寺
	十二天曼荼羅図	金剛峯寺
	水天像※	正智院

※4頁で詳しくご紹介しています。

彫刻

重文	深沙大将立像（快慶作）	金剛峯寺

重要文化財　法華一品経のうち観普賢経（後期展示）



神通論断簡
（本紙縦26.5cm 横7.5cm）

普広菩薩経十八文字片
（本紙縦13.0cm 横2.3cm）

重　文　四天王立像（快慶作）　金剛峯寺
重　文　大日如来坐像（西塔旧在）　金剛峯寺
重　文　不動明王坐像（奥之院護摩堂旧在）※　金剛峯寺
重　文　愛染明王坐像（青巌寺旧在）　金蔵院
　　弁才天坐像　金剛峯寺

※15頁で詳しくご紹介しています。

書跡

重　文　紺紙金字一切経のうち観普賢経　金剛峯寺（前期）
重　文　法華一品経のうち観普賢経　金剛峯寺（後期）
　　神通論断簡（伝・弘法大師筆）　金剛峯寺
　　普広菩薩経十八文字片（伝・弘法大師筆）　円通寺
　　神智察釈文九（紙背：月燈三昧経巻十）　竜光院
　　高野山（大師流額字）　五大院
　　唐大雅集碑拓本　王羲之筆　霊宝館
　　随皇甫君之碑拓本　欧陽詢筆　霊宝館
　　孔子廟堂之碑拓本　虞世南筆　霊宝館
　　顔氏家廟碑拓本（甲）　顔真卿筆　霊宝館

工芸

県指定　手錫杖（伝・弘法大師所持）　金剛峯寺
　　硯箱并硯石（弘法大師所持）　竜光院
　　数珠之焼玉（伝・弘法大師所持）　金剛峯寺
　　鉄鉢（伝・弘法大師所持）・八重鋺　金剛峯寺
　　五鈷杵（伝・弘法大師所持）　有志八幡講
　　御草履（伝・弘法大師所持）　金剛峯寺

次回展のご案内

春期企画展「悠久の美―高野山の金工品」
平成25年4月27日（土）～7月7日（日）

収蔵品の紹介 79

水天像（すいてんぞう）

縦 139.7 cm　横 72.8 cm

絹本著色　江戸時代　正智院蔵

水天像

水天像（部分）

今年の干支・巳年にちなみ、ヘビ（？）が描かれている本像を紹介します。

水天はその名の通り、水や河の神様で、インド神話を起源とし、密教では十二天の一尊として西方を守護するとされるほとけです。両界曼荼羅の金剛界・胎蔵界いずれにも描かれ、また密教寺院の本堂には、十二天の屏風が置かれたり、軸がかけられます。本像は通形の立像で、水中を泳ぐ亀の背に乗り、薄緑の体に三目、手には剣と、ヘビを結んだような「龍索（りゅうさく）」を持ちます。頭の上には、カラフルな七匹の角のある龍が乗り、よく見るとそれぞれが違う方向を見ていて、なかなかかわいい顔をしています。この生き物は龍とされますが、曼荼羅に描かれる水天では角のないヘビを載せていたり、髭（ひげ）や毛が生えてないことや手がない（見えていない）ことからも、強引ですがヘビに近い龍、といえるかもしれません。

本像は善女龍王（ぜんにょりゅうおう）像、風天（ふうてん）像（十二天のうちの一尊）と共に三幅対で正智院に伝わっています。『紀伊続風土記』によりますと、旱（ひでり）の際には伽藍金堂において善女龍王を本尊として祈雨の修法を行い、それでも効果がない場合は正智院の僧を導師として、かつて正智院領だった大滝（おおたき）（高野町）で修法を行い、たびたび霊験があったといいます。善女龍王に比べると水天・風天像は新しい時代のものですが、雨を降らせる力を強めるために、共に祀るようになったと思われます。

余談ですが、昨年末に本像を本館に展示した途端、雨が降ってきたのであまりのいいタイミングに驚きました。

（F）

風天像

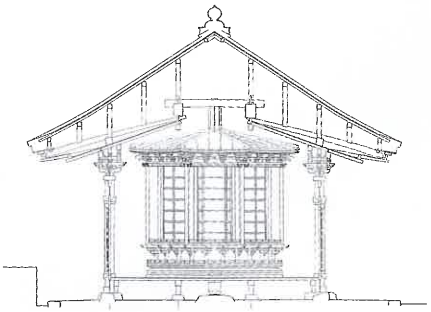
善女龍王像

連載

高野山の古建築

第九回　重要文化財 金剛峯寺奥之院経蔵

鳴海 祥博



経蔵の断面図　建物の中には輪蔵が造られ、ここに一切経が収められている。

経蔵の外観　簡素だがよく見ると、軒を支える組物は格式ある出組みとなっている。

輪蔵の詳細　柱の直径は10㎝。模型のようだが精巧に造られ、美しい文様彩色で彩られている。

経蔵の内部　全面に彩色が施されている。左に輪蔵の軒先部分が見える。

高野山で最も神聖な奥之院。その参道のたどり着いた先、灯籠堂の右奥に経蔵はひっそりと建っています。

経蔵はお経を収める書庫で、ここには高麗版一切経六千余帖が収められています。

経蔵の正面に扁額が掲げられていて、これには慶長四年（一五九九）に石田三成が母の菩提を弔うために、木食応其上人の勧めで寄進した、とその由来が記されています。

経蔵は三間四方の素木の建物で、桃山時代の建物としては飾り気も少なく、奥之院の静寂に包み込まれています。

外からでは窺い知ることのできない経蔵の内部を紹介しましょう。

経蔵は書庫なので、そこには書棚があります。書棚は八角形の回転式の書架で、輪蔵といいます。書架は七段で、一段に三個、八面で合計一六八個の経箱が整然と納められています。

経文の検索に便利なように回転式の書架が考案されたのでしょう。そして一回転させると一切経の功徳が受けられるとされています。

輪蔵は中心に回転軸となる一本の太い柱を建て、その柱に貫を差し通して書架を組み立てます。書架といっても柱や組物、軒や屋根を造り、小さいながら建築そのものです。

造りは精巧で隅々に装飾彫刻を飾っています。回転式構造の巧みな架構や部材の取り合わせなど、すべてに高度な技法を見ることができます。

輪蔵は中国で考案され、日本には鎌倉時代に伝わったとされています。ここ奥之院の輪蔵は、現存するものでは三番目に古い貴重な遺構です。

素木で質素な経蔵の外観からは想像もつきませんが、建物内部は、輪蔵も含め一面に文様彩色が施され、その色鮮やかさには目を奪われます。

経蔵の壁面には十六羅漢像、輪蔵の柱には十二天像と上り龍・下り龍などが描かれ、その他の部材も様々な文様彩色で彩られています。それらの彩色は四百年以上を経たとは思えないほどの鮮やかさです。

経蔵の内部は、お経の教えのありがたさに光が充満し輝いている、そんな空間が遺憾なく演出されているのです。

このすばらしい造形を造り上げたのは一体どんな人達だったのか、残念ながらそれを知る手掛かりはありません。石田三成、そして木食応其が造営に関わっていることから、恐らくは豊臣氏の造営に参画して桃山時代の造形を造り上げた工匠集団であったに違いありません。経蔵内部の彩色や輪蔵に飾られた建築彫刻などは桃山時代の様式を遺憾なく発揮しているのです。

経蔵が竣工した翌年、関ヶ原の合戦で石田三成は破れ、木食応其も高野山を離れます。一切経の奉納と経蔵建立は、豊臣秀吉から絶大な信頼を得て、戦国の争乱から高野山を守った木食応其の、高野山での最後の事蹟となったのでした。

（高麗版一切経と扁額は現在霊宝館に移され、経蔵正面にある扁額はその模造です）

第七回もみじ祭
フォトコンテスト入選作品発表
（受賞者敬称略・順不同）

グランプリ賞　山口　隆章

撮影場所：伽藍

題「天空の金環日食」

退職後、21日の高野参りを始めて9年、日食の日とは聞いていたが、いつもの時刻より1時間早く出発。7時過ぎに壇上伽藍に到着。すでに日食が始まっていた。天気予報では晴れ、しかし厚い雲の流れが非常に速く、太陽が出たり隠れたり。太陽が出るとファインダーは覗けない。出る寸前に300ミリで撮影。

標高850メートルの高野山、大塔の高さは約50メートル。つまり宝輪の位置は900メートル。人工物対比の今回の日食写真では、日本一の高さではないかと。

お大師さまのおかげです。合掌

第七回もみじ祭フォトコンテストは、後世に伝えたい写真、身近な人に伝えたい写真など「伝えたい、高野山の一枚」というテーマで募集し、四十九点の応募をいただきました。高野山に参詣して感じた様々な気持ちが込められた応募作品からは、高野山の魅力を多くの人々に伝えたいという思いが溢れています。

その中から十五作品が優秀作品として選ばれましたので、結果発表と合わせてご紹介させていただきます。長い間変わらない高野山の伝統やお大師様への思いを写したものと、刻一刻と移りゆく時間の中の今だけを写したもの。悠久と一瞬の二つの時間の素晴らしい高野山が伝わってきます。

全ての応募作品は4月21日（日）まで霊宝館で公開していますので、ぜひご覧ください。

たくさんのご応募ありがとうございました。

金　賞　正田　大輔

撮影場所：奥之院（参道）
題「灯（ともしび）」
高野山に通って10年、毎年必ず訪れる萬燈供養会。衆生の救済にその一生を捧げた弘法大師の想いと共に受け継がれる灯。人々が自分のことではなく他者を思い手を合わせ、ろうそくに灯をともすこの日。私は無数の暖かい灯がともるこの風景を絶やさぬよう、後世に、そして多くの人々に伝えていきたいと思っています。

金　賞　丹下　三郎

撮影場所：金剛峯寺
題「信仰のファミリー」
初秋の曇り空の肌寒い朝、家族７名全員が巡礼姿で金剛峯寺境内を行く光景に目が止まりました。（先頭を行く祖母の姿が写らなかったのが残念です）
父親の背中に負われた幼子がこの先、成人となり、大師のみおしえを継がれん事を。
「伝えたい、高野山の一枚」です。

銀　賞　杉本　博

撮影場所：金剛峯寺
題「巡礼の思い」
紅葉の見頃、霊場高野山は外国の観光客が増えているようで、四国巡礼の結願参りの人と出会い、お話ししているとき、外国の観光客に取り囲まれて、たちまち人の輪ができおだやかな雰囲気となりました。その時、記念に撮りました。
世界遺産として各国の大勢の人々が訪れてくれますように。

銀　賞　木下　滋

撮影場所：伽藍
題「御影堂の朝」
歴史ある高野山。数ある堂宇の中でも檜皮葺の姿が美しい御影堂が特にお気に入りです。日中は参拝の方や、観光客が多いですが、夜から明け方にかけての時間帯は、静かな佇まいの御影堂を楽しむことができます。

銅　賞　岩崎　さとみ

撮影場所：伽藍（蓮池）

銀杏の見事な黄葉と噴水池の橋の反射が絶妙にマッチしていて感動！この場面を残しておきたくてシャッターをきりました。

銅　賞　西岡　須美代

撮影場所：伽藍（じゃばら道）

高野山へ訪れるたびに必ず足が向いてしまうお気に入りの撮影スポットです。春は目が覚めるような新緑、秋には色鮮やかな紅葉を広角レンズの特長を活かして、東塔を包み込むように写すのが好きです。この日は早朝３時に家を出た甲斐あり、冷気の中で大勢の僧侶達が無心にお経を唱える声が辺りに低く響き、朝陽が神神しく姿を照らし、身も心も引きしまり、いつもと違った撮影となりました。また一段と高野山への思いが深まった気がします。

銅　賞　西岡　国広

撮影場所：金剛峯寺

車を置いてまっ先に向かう場所です。石段の所はいつも人がいっぱいで、なかなかシャッターが切れなくて苦労しますが、今回は早朝だったのでスムーズに写すことができて、お気に入りの一枚となりました。

銅　賞　高橋　順二

撮影場所：じゃばら道

題「ご詠歌、唱和」

お練り法会の日、紅葉も盛りで快晴の気持ちのいい日で車も多く人も溢れていました。外国からの観光客も多く来られていて、色々と散策されていました。その中で儀式が始まり、僧侶の一行が向かわれる時と戻られる時に熱心にご詠歌を唱和されている様子が、代々受け継がれていると感じました。

霊宝館長賞　渡瀬　倭文子

撮影場所：金剛峯寺

駐車場に車を停め、正面の金剛峯寺正門をくぐります。参拝をすませ、正門の内から見る紅葉と、老若男女が階段を上ってくる姿を一緒にカメラに納めるのが私のお気に入りの場所です。今年も見事に色づいた紅葉をながめることができ、幸せのひとときでした。有難うございました。

霊宝館長賞　坂口　朝美

撮影場所：伽藍

四季折々、色々な表情を見せてくれる高野山が大好きで、やすらぎを求めてしばしば訪れています。先日、偶然『お練り法会』に行き会わせ、美味しい甘酒とご縁をいただいてきました。素晴らしいお天気で、僧侶の方たちの美しい衣が紅葉真っ盛りのまわりの景色に映えていました。私も含めて老若男女が歓声を上げながら散華を拾うなど、貴重な体験もしました。高野山がますます大好きになりました。

入　賞　稲葉　滋順

撮影場所：伽藍（東塔）

RED,RED,RED！：The Color of Life Celebrating the Millennium Grace.

赤。いのちの色は千年の優美を讃じて、燃える。

入　賞　麻野　卓三

撮影場所：奥之院（頌徳殿）

題「お大師さまからの贈り物」

11月中旬、極楽橋より紅葉の不動坂を登り御廟まで。頌徳殿にて熱いお茶を頂き、持参したお弁当をひろげ、御供所・御廟方向に目を向けると、色鮮やかな紅葉が窓枠のコントラストに浮かび上がって、みごとでした。ちょっとした幸せを感じながら、お弁当を頂きました。

入　賞　坂口　肇

撮影場所：奥之院（御廟橋付近）

昨今、地震や津波など天災が起こり多くの方が亡くなられました。大きな自然の力の前では、人はただただ祈ることで救われると思います。秋が深まる中、水向菩薩に手を合わせ平和と安全を祈り、標準ズームレンズでシャッターをきりました。

私の「伝えたい、高野山の一枚」は平和と安全への祈りです。

入　賞　小泉　和子

撮影場所：金剛峯寺

11月５日に普賢院で一泊しましたが、翌朝６時頃は雷が鳴って滝のような雨でした。金剛峯寺の参詣は傘をさして、と思っていましたがお陰で雨も上がり霧のかかった大変綺麗な紅葉を写せました。

高野山の文化財

期間限定特別公開

桃山時代の絵師・曽我直庵の屏風二種類を七年ぶりに公開します。直庵の人物画は少なく、珍しい作品です。春期企画展「悠久の美―高野山の金工品」と同時開催。

【絵画】

重要文化財・曽我直庵筆
「商山四皓及虎渓三笑図」（右隻・左隻）・「鶏図」（右隻のみ展示）

日　程：平成25年4月27日（土）～7月7日（日）
公開時間：8時30分～17時
（5月以降は17時30分まで）
場　所：高野山霊宝館新館第二室
拝観料：600円（通常拝観料）

「商山四皓及虎渓三笑図」のうち「虎渓三笑図」（部分）　遍照光院

鶏図（部分）　宝亀院

【建造物】

重要文化財・徳川家霊台

〈報告〉
平成24年11月1日～7日
22日～25日

徳川家霊台は、徳川初代将軍家康と、二代将軍秀忠を祀る二棟の霊屋です。寛永二十年（一六四三）の竣工で、日光東照宮とほぼ同時期の造営です。江戸時代前期を代表する建築とされ、現在では重要文化財に指定されています。

昨年秋、昭和三十六年の解体修理後、ほぼ五十年ぶりに開扉しました。十一日間で約五千人の来観者があり、格式高い外部の造形や、絢爛豪華な内部の装飾を、じっくりご覧いただきました。

重要文化財・徳川家康霊屋　昨年度公開の様子

家康霊屋内部の須弥壇と厨子

〈予告〉
全日本仏教徒会議高野山大会の開催にあわせ、今年も徳川家霊台を開扉することになりました。
日　程：平成25年10月12日（土）～10月20日（日）
公開時間：9時～16時30分
場　所：徳川家霊台
（家康霊屋・秀忠霊屋）
拝観料：200円（通常拝観料）

国宝・不動堂

〈予告〉
昨年ご好評をいただきました国宝・不動堂の特別公開を今年も実施します。（ただし内部には入れません）
日　程：平成25年8月27日（火）～29日（木）
公開時間：9時～16時30分
場　所：不動堂（壇上伽藍）
拝観料：無料、事前申込不要

この機会にぜひ、高野山の名宝、名建築を間近でご覧ください。皆様のご来山をお待ちしております。

第7回もみじ祭を開催しました（場所：当館敷地内「迎賓館」）

■長谷川智弘作品展 結びの世界「みやび」

（平成24年10月1日～10月7日）

仏教とともに伝わり、発展してきた日本の結び。霊宝館での開催が二回目となる今回は、伝統を受けつぐ作品のほか、現代の感性にも合う新しい結びを多数出展いただきました。仏堂内を飾るための華鬘結びや、色とりどりのくす玉、被布の結びなどが並んだ場内は、華やかな空気に包まれました。

■秋の茶会と書道展

（平成24年10月20日・21日）

昨年に引き続き、高野山大学の文化部が合同で、茶会と書道展を開催しました。

茶道部による茶会では、霊宝館にご来館の方を対象に抹茶のお接待をしました。

書道部による作品展は力作揃いで、書の歴史や魅力が伝わる内容でした。

また、華道部による「華道高野山」のいけばなも出展され、会場に彩りを添えました。

二十一日午後には高野山大学有志による箏の演奏が行われ、音色を間近で楽しむことができました。

両日とも多くの方が来館され、好評のうちに閉会いたしました。ご来場ならびにご協力いただいた皆様に御礼申し上げます。

訃報

当館の友鳴利英学芸員は、急病のため、昨年十一月十四日に永眠しました。三十一歳という若さでした。

ここに生前のご厚誼を深謝し、謹んでご通知申し上げます。

国宝・不動堂外観

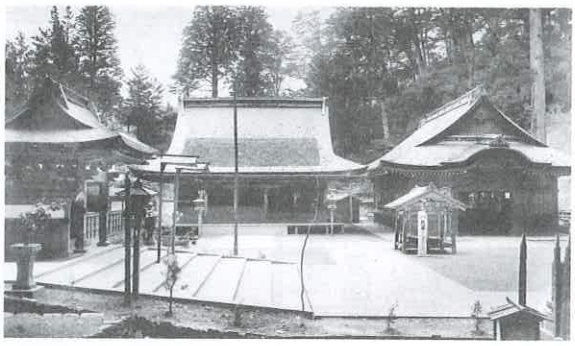
よもやま話 Vol.26

奥之院の護摩堂と不動院

【名　称】護摩堂　不動堂　護摩所　不動院
【創建者】真然僧正　性信親王　覚法親王　成賢僧正　貞暁法印
【本　尊】不動明王坐像　弘法大師坐像
【建築年】文化九年（一八一二）
【移築年】昭和三十七年（一九六二）十二月

高野山で弘法大師信仰の中心となるのが奥之院です。古来、弘法大師に最も近い奥之院で、一定期間の修行をしたり、祈ったりする人が後を絶ちませんでした。これを「参籠」といいます。今回は、この参籠をきっかけにして建てられたであろう護摩堂と、今は無き奥之院の不動院についてのお話です。

写真①　奥之院　護摩堂



写真②　大正時代の護摩堂の位置（正面）
右の建物は頌徳殿（茶所）です。大正4年（1915）の頌徳殿建設にともなって、その横に護摩堂を移転したものと考えられます。
絵はがきより

奥之院の護摩堂（写真①）は、現在、水向地蔵の横に位置しますが、昭和三十七年（一九六二）以前は御供所の南側、頌徳殿（茶処）の北側にありました（写真②）。

護摩堂には文化九年（一八一二）の棟札があるそうですので、建物自体の建築年代が判明すると同時に、寛政四年（一七九二）の焼失から、二十年後の再建であったことがわかります。

写真③　現在の頌徳殿（正面）と御供所門（左）

堂内は内陣と外陣からなり、内陣は左右二間で、向かって左側に本尊不動明王坐像と二体の毘沙門天立像をお祀りしています。その手前には護摩壇を配し、周囲壁面には十二天、八祖像が配置されています。本尊不動明王坐像は、昭和五十二年（一九七七）以降に新たに安置された尊像で、それ以前の本尊は、現在、霊宝館において常設展示中となっています。本像については後頁で紹介させていただきます。

一方の内陣右の間には、弘法大師坐像を中心に両脇に千体仏と称する小仏像群や、正面の奥には釈迦如来坐像（大聖能仁如来）、文殊菩薩坐像などが安置されています。弘法大師像は厄除大師とも呼ばれており、天保九年（一八三八）に刊行された『紀伊国名所図絵』には、弘法大師が四十二歳の時に自刻した像であると紹介していますので、江戸時代の後期には厄除の大師像として信仰されていたことがわかります。

奥之院護摩堂の歴史と人物

奥之院護摩堂の創建については、高野山第二世である真然僧正（八〇四～八九一）をはじめ、白河天皇の

第四皇子、覚法法親王（一〇九二～一一五三）、三条天皇第四皇子、性信入道親王（一〇〇五～一〇八五）、源頼朝の三男、貞暁法印（一一八六～一二三一）などの諸説があります。通説では康平二年（一〇五九）性信親王が奥之院で長期におよぶ参籠を行った際に護摩堂を創建し、寛喜元年（一二二九）に貞暁法印によって本尊と堂内の荘厳が整えられたとします。両親王創建説は、親王が奥之院で護摩供を修行していることから、当然、護摩堂を建てたはずだとする推測から出ているようです。貞暁法印説は『高野山奥院興廃記』という資料に、奥之院の南に護摩堂を建てたことが明記されています。

護摩堂関連の資料については、貞暁法印以降は乏しくなります。ここでは近世の資料ながら重要な事柄も含んでいる『高野山奥院護摩堂不動院縁起』（以下、『不動院縁起』とします）をもとに、その内容を以下にまとめてみました。

● 奥之院護摩堂は、真然僧正らによって弘法大師御廟の傍らに一宇を建立したのが最初である。

● 御廟橋の南側（現在の御供所付近）に僧房を建てて不動院と号し、御廟衛護と天下の安全を祈る場とした。

● 護摩堂と僧坊（不動院）との往来を厭って護摩堂を僧坊につけ（移築）、護摩供や求聞持法、八千枚護摩供といった長日の修法を間断なく行った。

● 御廟所と護摩堂は、不動院の支配とした。

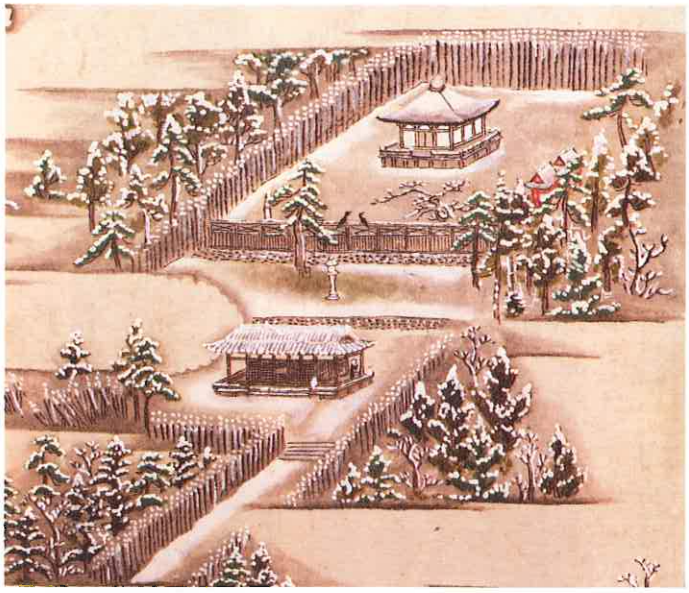
● 客坊（山外の客僧の僧坊）の僧侶は同志を集めて、金剛三昧院に属して教義を極め、光台院や不動院（奥之院）では結衆した。

● 奥之院の客僧たちは「奥之院結衆」というものを組織し、法力をもって護摩堂を相続してきた。

● 護摩堂は客坊なので相続に堪えがたく、建物も傾き朽ちつつあるので、再建を請うものである。

以上、『不動院縁起』は、不動院の弘雄寂心房が宝永二年（一七〇五）に古記録を書写したとするものです。この内容からは、護摩堂と不動院はある時期から一体化していることや、建物は客僧によって維持されてきたことがわかります。また縁起としながらも、護摩堂の再建願文でもあるのが特徴といえます。

客僧とは、高野山以外から参籠目的で入山した僧（山伏など）のことで、奥之院で修行する課程で組織化していったと考えられ、その拠点となった僧坊が不動院ということになります。『護摩堂近代先師記』という資料には、良澄十穀・快秀十穀・弘雅十穀・蝶魂十穀（～一四八八）・長弘木食者・教弘十穀・権僧正快音・十穀快真上人などの八師の名前があげられ、さらに高野山文書（『続宝簡集六十一』）の中には、快真上人に継ぐ「当院（護摩堂）第七代朝尊」の名が見えるなど、歴代にわたって、およそ十穀聖系の僧で占められていたことがわかります。この十穀聖とは、雑穀類の内、十穀を食べない修行を行っていたらしく、通常は勧



写真④　高野山古絵図写　奥之院、御廟と灯籠堂部分　金剛峯寺

写真⑤　高野山古絵図写　奥之院、御廟と灯籠堂部分　金剛峯寺

『不動院縁起』によると、護摩堂は弘法大師御廟の傍らにあったとしますが、写真④の鎌倉時代の様子を描く絵図には、それらしき明確な建物は描かれていません。ところが、南北朝時代以降の様子を描く写真⑤の絵図には、灯籠堂西側（向かって左）に、主殿とは別の建物がくっついているように描かれています。護摩堂は「灯籠堂の西の辺にある」とする説もありますので、実際に存在した時期があった可能性もあります。

進僧を意味するようです。また木食聖とは、特に弘法大師への篤い信仰からか、穀味（こくみ）一切を口にしない苦行を行いつつ、やはり勧進活動を行っていたことが知られています。

木食長弘上人（一四八一～？）

護摩堂の歴代先師の中で、「木食」は長弘上人が唯一となります。上人は、天文十三年（一五四四）から護摩堂、不動院、御供所を再建し、天文十六年には伽藍大塔の鐘を鋳造（ちゅうぞう）寄進しています。元は大和十市郡三輪の平等寺住職でしたが、高野山に入って、蓮坊（蓮定院）に住します。

写真⑥　高野山絵図護摩堂部分　江戸時代　持明院
「護摩堂」と書いている建物の左端が護摩堂で、不動院の建物は東西九間、南北七間の規模でした。

写真⑦　奥之院絵図護摩堂部分　江戸時代　金剛峯寺
「護摩堂」と書いている建物の後方（向かって右）が不動院ということになります。護摩堂は天正14年（1586）木食快真によって、御廟の傍らから不動院へと移されたとの説もあります。

その後、不動院へ移り住み、穀味を絶ってからは木食長弘と呼ばれるようになりました。ちなみに木食行は二十年におよんだそうです。

十穀快真上人（一五三〇～一五九五）

護摩堂第六代を名乗る十穀快真上人は、与州郡（愛媛県）宝持院の住職でしたが高野山発光院に入り、後に不動院へと移り、天正十四年（一五八六）に護摩堂を再建し、弘法大師御廟も建て替えています。この時、豊臣秀吉の母、大政所（おおまんどころ）より金十枚の寄付を受けたとされています。

長弘上人や快真上人の出自はいずれも客僧であり、その活躍時期は室町時代後期以降であることがわかります。快真上人は第六代というのですから、護摩堂十穀としての第一代目となると、おおよそ室町時代の初めにまで遡るのではないでしょうか。その中で、特に長弘、快真両上人の時代には、奥之院を中心に勧進活動を組織化していたことが諸資料から読み取ることができます。

奥之院の木食や十穀の特徴として長弘上人を例にすると、勧進の目的を達成するためには穀を断って驚異的な回数の護摩供をはじめ、各種の修法、祈祷（きとう）を行ったことにありました。護摩堂はそうした修法を行う場所として重要であり、僧坊としては不動院が拠点となったと考えられます。護摩堂を移転した理由について『不動院縁起』には、「護摩堂と僧坊との往来を厭（いと）った」としていますが、これは修法の多さゆえのことであったのでしょう。

こうした勧進と諸堂造営の拠点ともなった護摩堂・不動院であるにもかかわらず、『不動院縁起』が著わされた時期には、すでに自力で護摩堂を再建できない状態にあったことを示しています。それは、江戸後期には護摩堂が貞暁法印ゆかりの蓮定院の末寺として運営されていることからも、木食や十穀の活動は、すでに遠い昔のものとなっていたと理解することができます。

現在、奥之院の不動院は現存せず、廃絶の時期も明確ではありません。天保十年（一八三九）完成の『紀伊続風土記』によると、不動院では千体仏を安置して諸人に牘守（たまもり）を授けていたとすることから、現在の護摩堂内陣に祀られる千体仏などは、元、不動院の尊像であった可能性があります。

護摩堂旧本尊
不動明王坐像のこと

（写真⑧・⑩）

護摩堂の元本尊で、明治四十一年（一九〇八）に旧国宝となり、後に重要文化財に指定されています。霊宝館には昭和五十二年に収蔵されました。

本像は鎌倉時代の造立になるもので、源頼朝の三男、鎌倉法印貞暁（じょうぎょう）により寛喜元年（一二二九）に安置されたと伝えています。しかし、本像からはそれを裏付ける銘文などは見つかっていません。ただ台座には銘文があり、それによると正中元年（一三二四）に岩座から瑟々座（しっしっぞ）（現台座と同形）に変更した内容が写されています。現在の台座は護摩堂が焼失した寛政四年（一七九二）に再造立されたもので、当時の護摩堂の主は「奥院護摩所末葉喬秀」でした。光背については、不動院秀雄によって明和五年（一七六八）に新調されたことが光背に記されています。さらに近年の頭部の修理の際に、多数の墨書が見つかっています（写真⑨）。その中に「覚円」との名前があり、これが僧名なのか、それとも仏師覚円なのか、現時点ではよくわかりません。覚円の文字の下に「花押（かおう）」らしきものがありますので、僧名の可能性が強いと考えるべきなのかも知れません。花押とは署名の代わりに使用される記号のような文字のことです。

ところで本像とよく似た像が石川県珠洲市法住寺に存在することを知りました（写真⑪）。元は、かつらぎ町天野社（丹生都比売神社）護摩堂の本尊であったのが、明治二十四年（一八九一）以降になって法住寺へ移されたといいます。

両像の共通点は、その姿が同じであることはもちろん、歯を水晶で表現することや、衣に施された文様が単に描くだけではなく盛り上げて表現しているなど共通性も多く（写真⑫）、両像にはなんらかの関係性があるかと思われます。今後の解明に期待したいところです。

（M）

※写真の使用に関しましては、各所蔵者のご承諾を頂戴いたしました。記して感謝申し上げます。

写真⑧　元護摩堂不動明王坐像　金剛峯寺

写真⑨　元護摩堂不動明王坐像頭内部墨書（後頭部内側）

写真⑫　元護摩堂不動明王坐像盛上彩色部分

写真⑪　不動明王坐像　法住寺蔵
写真提供：珠洲市立珠洲焼資料館

写真⑩　元護摩堂不動明王坐像

霊宝館の庭園

コウヤマキ・高野槙・ホンマキ・金松

元高野山高等学校長　亀岡　弘昭

コウヤマキはコウヤマキ科・コウヤマキ属の常緑高木、高野槙の字を当てるのが慣用となっています。

和名のコウヤマキ、用字の高野槙は、高野山が代表的な自生地、産地であることに由来しますが、高野山の特産樹ではありません。

自生分布は本州（福島県以西）・四国・九州（宮崎県以北）の内陸山地とされ、「木曽五木」の一つでもあります。

霊宝館庭園の金松

別名はホンマキ、単に、まき（槙・槇）といえば本種をさし、槙・槇の字には「木の葉が密に茂るさまや木目のつまった木」という意味があるそうです。

東京大学の前川文夫名誉教授は『日本固有の植物』という著書にコウヤマキについて「生きていれば火に強く材となれば水に強い」として、明治と大正期の高野山の寺院火災の例をあげ、二件とも境界に、この樹があったことにより類焼を免れたと書き遺されています。

霊宝館では、昨年「天皇の霊宝―王朝が見た高野山―」という、秋の展覧会が開催されました。

そのこともあって、霊宝館の庭園や高野山の、天皇や皇室と縁のあるコウヤマキ（高野槙）を。

霊宝館の庭園内には、『大正十二年五月二十六日　秩父宮雍仁親王御手植の金松です。「金松」とは高野槙の別称』と紹介された説明板の建てられているコウヤマキがあります。

秩父宮雍仁親王は、大正天皇の第二皇子、大正十二年（一九二三）は幼称・淳宮が成年式を終え、新宮家を創設し秩父宮の称号を賜った翌年、霊宝館が開館（大正十年・一九二一）されて二年後ということになります。この木は発芽してからであれば、百年を経ているのではと思われます。昨年九月、許可を得て実測したところ、幹周りは一・五三メートルでした。

この庭園を出て金剛峯寺の本殿前庭に入ると、左手西側の経蔵のそばでは秩父宮親王の兄君である昭和天皇と皇后陛下行幸啓（昭和五十二年・一九七七）記念植樹のコウヤマキを、しっとりとした雰囲気の中で観ることができます。

高野山の造林事業との、ご縁では紀州の植物研究者であった小川由一氏は『紀伊植物誌』において、京大農学部・赤井龍男助教授は当時（昭和五十四年）の大阪営林局の依頼による高野山の国有林植生調査報告書の中に、記録・史実として、覚法親王が、大治五年（一一三〇）にコウヤマキを挿植されたということを書き遺されています。覚法親王とは白河天皇の第四皇子で出家された覚法法親王。

青空と金松の樹冠

伝説の名木については後白河上皇と融源上人ゆかりの「轟槙」のことが語りつがれています。

新しい、ご縁としては、平成十八年（二〇〇六）九月十二日、秋篠宮家の悠仁親王の「お印」が「高野槙」と決まったことがあげられます。